

センター通信

石狩地域森林ふれあい推進センター

今回は、当センターの活動フィールドの一つである野幌国有林で実施している「野幌自然環境モニタリング」を紹介いたします。

平成16年9月、台風18号が北海道に上陸し、野幌森林公園（約8割が国有林）においても、大規模な台風被害が発生し、早急な復旧・森林再生等の取組みが必要となりました。

被害を受けた「野幌の森」の再生目標を「百年前の原始性が感じられる自然林を目指した森林づくり」とし、

- ①天然林被害地は自然の推移に委ねる
- ②人工林被害地は人手をかけ、自然林を再生させる
- ③森林再生活動の実施にあたっては、市民参加を積極的に進める

ことを主な内容とする「野幌森林再生プロジェクト」を策定し、具体の活動に組んでいます。

さらに、プロジェクトにおける森林再生を目に見える形にするため、自然環境の変化の把握を目的に、学識経験者からなる「野幌自然環境モニタリング検討会」を設置し、森林植生、菌類、

歩行性甲虫、野生動物について、調査を行っています。調査の対象は

- ①森林再生活動地（植栽地）
 - ②良好な自然林
 - ③風倒木を搬出したが植栽していない箇所（半処理区）
 - ④風倒木を搬出せず植栽もしていない箇所（未処理区）
- の4つに区分し、モニタリングを継続実施しています。
- ※動物撮影については、野幌国有林の全域を網羅するよう12箇所に装置を設置（夏、秋）



野幌自然環境モニタリング検討会の検討委員

【各調査の目的と結果】

○森林植生調査

樹木の成長量や下層植生を調査しています。

再生活動地における、植栽木は年々着実に伸長成長が増し、枝張りが広がりササの植生高を抜けたところがあるのでササとの競争は考えなくても良い段階に入っています。

○菌類相調査

森林生態系における菌類は分解者として機能し、森林の生育に深く関わっています。それぞれの調査地で見られる種の経年的な変動や箇所による違いを比較することとしています。再生活動地と良好な自然林では、確認種数の増減が見られたものの、確認種の出現頻度に著しい変化は見られなかったが、再生活動地では新種の確認が増えていきます。



野幌自然環境モニタリング現地検討会

○歩行性甲虫相調査

オサムシ等の歩行性甲虫は、環境の変化に最も敏感に反応する分類群の一つです。

ピットフォール（落とし穴）トラップによる捕獲調査を実施しています。総合的に見て、開放性の昆虫の

割合が減少し、森林性の歩行性甲虫の割合が増加しています。

○野生動物相調査の評価

エゾシカの侵入やアライグマの増加は、森林生態系に及ぼす影響が懸念されていることから、自動撮影装置による調査を実施しています。

確認種数と確認種構成に大きな違いはなく生息するほ乳類に目立つ変化は確認されていません。

エゾタヌキは撮影頻度の増加が見られ、生息数の増加が推察されます。

特定外来種のアライグマは、撮影頻度は減少しているが在来種への影響など引き続き注視する必要があります。エゾシカの撮影頻度は今のところ低く、森林への影響はまだ少ないと思われます。

【今後に向けて】

これまでの調査結果からは、順調な森林再生の様子がうかがえます。

今後は各種貴重な調査データを基に森林管理ができるように、データベース化を進めたいと考えています。